

第十一講 軍人皇帝時代の元老院皇帝

論文の背景

アレクサンデル=セヴェルス帝の暗殺 (235)

マルコマンニ族との戦いの最中、兵士の反乱によってマインツで母ユリアとともに暗殺される

マクシミアス=トラクス (235~238)

アレマン人を撃破

メソポタミアにペルシア軍侵入 (237)

ゴルディアヌス三世 (238~244)

メソポタミアに侵入したシャープール一世のペルシア軍をレザイナの戦いで撃破 (242)

フィリップス=アラプス (244~249)

ローマ建国一〇〇〇年祭挙行

デキウス (249~251)

最初の全帝国規模の迫害

ゴート人との戦いの最中に陣没

トレボニウス=ガルス (251~253)

ゴート人と和睦

ワレリアヌス (253~260)

東方の防衛に専念。西方はガリエヌスに委ねる。

ゴート、クァディ、サルマタイ人の侵入 (254)

パルティア人の侵入

フランク、アレマン人の上ゲルマニア、ラエティアへの侵入

北アフリカではマウレタニア人が国境侵犯

シャープールにエデッサの町で捕らえられる (260)

ガリエヌス (260~268)

軍事改革を断行

機動騎兵軍団創設

ラエティア総督のアウレオルススの反乱。ミラノ攻囲中に暗殺される。

クラウディウスを後継者に遺言。各兵に金貨二〇枚を遺贈。

西方出身の英雄的な軍人皇帝たちの輩出：

クラウディウス二世（268～270）

- ・ドナウ河流域の地方出身者
青年時代を軍隊で過ごす
デキウス帝の寵愛と信頼を得る
ヴァレリアヌス帝により抜擢される→イタリア辺境の総司令官→トラキア、モエシア、ダキア、パンノニアの全軍隊の指揮権付与。エジプト長官。アフリカ総督。執政官。
ゴート人に対する勝利
ガリエヌスの嫉妬を招く
- ・54歳で即位
アウレオルスを下す
軍隊の規律再建
ゼノビアに東方の支配を任せておく
- ・眼前の差し迫った脅威に努力を集中
2～6千隻の艦隊（32万）を擁してゴート人、黒海より侵攻
テッサロニカ市を攻撃→イタリアに侵入
「元老院議員諸君。32万のゴート軍がローマの版図の中に進入したことを承知あれ。余もし彼等を打ち破りしなば諸君の感謝は予の勤労にあたうべし。予もし失敗せば、予はガリエヌスの後継者たることを記憶あれ。今や全国は挙げて疲労困憊しあり。我等はヴァレリアヌスの後に、またガリエヌスに対する軽蔑を動機として背反したるインゲヌス、レギレヤヌス、ロリヤヌス、ポストゥムス、ケルスス及びその多幾百千の後を受けて戦わんとす。我等は投げ槍にも長槍にも楯にも欠乏しあり。帝国の実力たるイスパニア及びガリアはテトリクスに篡奪せられあり、また東方地方の射撃隊はゼノビアの揮下に勤属しあることを汗顔をもって認めざるべからず。我等のおさむべき成果はその如何に関わらず十分に偉大たるべし。」
ゴート人を撃破→Gothicus と呼ばれる
アレマン人を下す（268）

ゴート人をナイッスの戦いで破る (269)

シルミウムで病にて息を引き取る

アウレリアヌスを推挙

アウレリアヌス (270～275)

- ・パannoniaのシルミウム地方の農民の出

兵士に応募→百人隊長→高級将校→軍団長→前線司令官→騎兵総司令官
→ヴァレリアヌス帝により執政官に補任

「イタリアの救助者」「ガリアの回復者」「両スキピオの拮抗者」

ヴァレリアヌス帝の推挙によりトラヤヌス帝の子孫、元老院議員のアル
ピウス・クリントゥスにより養子となり、その娘と結婚

- ・僅か4年9ヶ月の統治：記憶すべき偉勲栄光によって満たされる

ゴート戦争を終わらせる

ガリア、イスパニア及びブリタニアをテトリクスから奪還

ゼノビアの王国を破壊

軍に対しては、飲酒、賭博、占いを厳禁

略奪を禁止

パヴィアでアレマン人を破る (271)

パルミュラのゼノビアを下す (272)

60年以来独立していたガリア帝国を下す (274)

帝国の再統一

「主にして神」なる称号を称する→太陽神崇拝を導入

タキトゥス (275～276)

プロブス (276～282)

ライン川、ドナウ河の国境を平定

カルス (283～284)

ペルシア遠征勝利後、子のカリヌス、ヌメリアヌスとともに陣没

ディオクレティアヌス (284～305)